
アホとピアスとメガネとバカ校。

岡山リサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アホとピアスとメガネとバカ校。

【Nコード】

N6677A

【作者名】

岡山リサ

【あらすじ】

バカでゆるくて成長なんてしてなくて。それでも青春な3人の日常。

ユルイ日常+ バカ校とは

空を見上げると、真っ青なそのの中を、ゆっくりと泳ぐように飛ぶ飛行機が見えた。周りに高いビルも無く、空を見るのに邪魔は入らない。ここでは空は、オレのもの。

2、3歩歩いてフェンスに身を預け、下を見下げれば、弱小テニス部が整備もしていないコートでかつたるそうに球を追っている。3組の松田さんは、ピアノのレッスンで休みらしいから、盗み見る気もしない。

もう一度だけ、上を見ると、さっきの飛行機はとつくに視界からは消えていて、真っ青な空に浮かぶ真っ白な雲が、ただ、のろまなレースを繰り返していた。

空が 雲が 青が 白が

あ、何にも思い浮かばねえや。

「ねえ、何考えてんの？」

高校3年生にしては落ち着きがないその声に、振り返れば、そこにはヤキソバパンをくわえたナベキが立っていた。あ、口の横、青のりついてやがる。「別にイ？空はオレを詩人にするなあ、と
思っで。」

なに？キモイんだけど、とナベキがオレの横に歩いて来た。高いフェンスにオレとナベキが寄りかかるかたちになる。

「雲ねえ。あ、ソフトクリーム。ねえ、シュウ君、ソフトクリーム！」

ナベキが『ソフトクリーム』型の雲を指差し、後ろでオレ等を見
ていたシュウ君に叫んだ。なんでそんなにはしゃげるんだ？このバ

カ。

「ん？あゝ、雲？素敵やね。」 シュウ君の気のない返事がコ
ンクリの床を伝った。

「あ、ナベキ、ここ。」

シュウ君が自身の口元を指差して、青のりの存在を教える。今日
はシュウ君、ご機嫌がよろしいようです。

「あ、いっけね！」

てへつと笑うナベキは正直キモイ。

「ナベキ、キモ ス」

親指を立てて言うと、ナベキがなんだよう、と頬を膨らました。

だってキメエんだもんよ。

ユルイ日常+ バカ校とは(後書き)

はじめまして。岡山リサと言います。

皆さんから、続きが気になる、と言われるような、小説が書けるように、頑張ります！

ホームページで、ちょっと違う『アホと〜』を連載しています(こちらの方が、更新早めかと)。

<http://my.peps.jp/1549>

ユルイ日常＋ バカ校とは2

「シユウ君シユウ君、オレさあ、今度数学あたんのー！」

「ナベキ、声かいでー。」

「ぶ。 。 ねえ、シユウ君ノート見して。」

ナベキ、まじで声でかいわ。アホ丸出しな会話。

「んー。教室にあんべ。取ってこい。」

シユウ君、本当に今日はご機嫌がよろしいようで。あ、オレも次あたるんだつたわ。

「ねえ、シユウ君、トクちゃんにも国語見して上げてえ。」

オレなりのキュートウ、オイスでシユウ君におねだりしてみる。

「だはははは！！！！！トクちゃんキモ。スだじえ！！！！！」

ナベキが親指立てながらアホ面で爆笑してやがる。

「えー。国語俺もしてないもーん。無茶。」

げ、マジかこいつ。使えねえ。とか、口に出しては言わねえけど。

「んー。んじゃいつか。」

全然良くは無えんだが、それが許されるのがこのバカ校。見渡したって山しか見えないド田舎では、中学なんて片手で数えても足る程。そこにいるヤツらの半分近くはこの最強なド田舎ぶりに吐き気を覚えて離れて行く。

だから高校なんて片手で数えても余る程。その内のひとつがこ

こ、鷹伊高校。通称他界高校。略してタカ高校。通称バカ校。

通う生徒のほとんどが地域のポリスマンに一度はお世話になっていて、夏祭りのキュートな暴走族のほとんどがバカ校生徒。要するにゴミ箱だ。

地域からは煙たがれ、親からは見放され、社会からは入口を閉鎖され。

そんな言い方をしたら、まるでオレらが被害者でかなり可哀想なヤツらに聞こえるけど、別に悲しい気はしない。ような気がする。

立ち入りを一応は禁止されているこの場所で、毎日こいつらと喋って、たまには高3らしく進路についても考えてみたり、でもやっぱどうでもイイヤ、と投げ出してみたり。そんなユルくて温い毎日
が、嫌いじゃないのはオレだけなのかな。

中3のときは大嫌いな家を出る気で一杯だったけれど、どういう訳か、オレはこのド田舎が大好きだ。好きで好きでたまらない。愛している。

まあ、そりゃ言い過ぎなんだけど。

ユルイ日常 + バカ校とは3

ここを離れる事にした中坊には、3つの高校しか残って無い。

- 1、ガリ勉、東栄高校（栄校）
- 2、とにかく普通、秀英高校（秀校）
- 3、バカだらけ、鷹伊高校（バカ校）

大抵のガキは2を選ぶんだが、生憎うちには私立の秀校に行けるような金は無え。無えつつうわけじゃねえけど、無え。1なんか、手も付けたく無かったから3を選んだ。

超悩んで、3分くらい超悩んで、中坊のオレは、3を選んだ。

多分この選択は間違っつて無い。と思う。

おかげでオレ等は出会えたし、はつきり言っつて、かなり楽しく毎日を生きている。生きている。

おそらく、おそらくだけど、間違っつてなんかいいえんだ。

「あ、今何時？」

ぼーっと、んなこと考えてたら、もう昼休みは終わりに近づいてるみたいだ。

テニスコートからは形だけの『ありがとうございました。』が聞こえた。

「次授業なんだっけ？」

「なんだっけ、理科？」

「国語じゃね？」

「え、古典？現文？」

「知らね。」

「古典だよ、白川じゃん？」

「げ！あのハゲ！？」

「……………どうする？」

「……………」

フッと笑って、オレ等はいつものサボリ場所まで駆けて行った。廊下では3組の松田さんとすれ違った。顔が赤くなった。

多分オレは、この生活が好きだ。

彼女は居なくても。

視線は冷たくても。

親はウザクても。

日は昇らなくても。

「オイ！Mr.ピアッシャー！！」
タバコ臭い職員室からは、白川の、オレを呼び止める声が聞こえた。

トクちゃん + リバウンド(前書き)

松永徳太郎。ピアスで固められた、おれらの仲間。

トクちゃん + リバウンド

「ああ！トクちゃん、耳穴増えてないっ！？」

トクちゃんの進化に、最初に気付いたのはナベキ。

「うっわー、何個目？」

何故か自分の耳を押さえながらそう言うナベキを横目に、トクちゃんの耳元を見てみると、確かに一つ、ピアスが増えている。

ピンクのプラスチックリングの下に光る、紫色のチャチな石。

ぎっしりと金属たまたまにプラスチックで敷き詰められているその耳に、よくもまあ、スぺ

ー見付けられたね（はあと）。

「左は8こ？9こ？あれ、何個だっけ」

自分の身体に開いている穴の数も分からないそのオチャメっぷり。あれ？トクちゃんてそんなにイタイ子だったっけ？

「なあ、どう？シユウ君、イカしてるべ？アツイベ？」

「つか、俺には自分の穴の数も数えられないあんたの脳内が、不思議でなんなのです」

「うっわ！つめた！！」

ケタケタ愉快そうに笑うトクちゃんを、隠れて心配している俺は、お節介だろっか。

トクちゃんのピアスは反発の象徴。

ピアスホールは落とし穴。

「なあ、今日はどうする？」

「暇！果てしなく暇！」
「俺、勉強したいんだけど」
「よしっ！けてーい！！トクちゃん家に居候」
「ざっけんな！殺すぞアホナベキ！！」
「なあ、俺の勉強計画はシカトなわけ？」
「だあかあら！トクちゃん家でしたらよい」
「超！迷惑」
「はい、けてーい」

そんな会話があって、トクちゃん家に初めて行ったのが、中学生のとき。

ナベキは幼馴染みただけあって、『おれ、行き成れてます感』があった。初めて行く家というのは、どんなにクズ友達の家でも緊張するんだ、とこの日初めて知った気がした。ナベキんときはしなかつたけど。

思っていたよりも広い家。というか、相当広い家だ。

『そういや、トクちゃんの親父って栄校の教師だったな』そんな事を思いながら、真っ白な扉を開ける。

玄関に入ると、微かにトクちゃんの匂いがした。

かったるそうなお邪魔しますの挨拶に、返ってくるのは何もなく、思わず『留守？』と尋ねてしまった。そんな俺から、ナベキは困ったように目をそらし、トクちゃんとはばけたように黒目を上に向けた。

何かなんだかわからないって顔をしていたら、奥のドアから楽しそうな声が聞こえた。

『あ、そうだ。あなた、悠君ったら、またテストで一番だったん

ですよ。ね、悠君？』

『そうかそうか、流石父さんの息子だなあ』 『この間のテストは、結構問題が易しかったんだ』

『いや、悠が努力を惜しまなかった結果だと思っぞ』

『そうよ、悠君！毎日あんなに遅くまで勉強して、お母さん心配しちゃったのよ？』

『本当だぞ、悠！母さんったら、いつつも悠君に夜食はいらないかしら、ちゃんと寝てるのかしらって、うるさかったんだから』

『もう、やめて下さいな、あなた』

『全く、母さんは過保護すぎるんだよ』

『悠君まで、そんな事言わなくてもいいじゃない』

『はははっ。まあまあ、とにかく！悠は父さんの誇りだよ。いいかい、悠？これからの時代、最低レベルの学力はつけておかないと駄目だぞ』

『父さん、それ、さっきも聞いたよ』

『そうよ、あなたったら』

『はははっ。そうだったかな？』

うふふふ。あははは。

廊下の奥のリビングからは、『幸せな家族』の『幸せな団欒』の音がこだました。

外からの生温い空気が漏れる、玄関からは、その『幸せな家族』の次男が放つ、無関心な視線。それには微かな怒りと悲しみが隠れている。

俺は、テレビの特番であるような、『可哀想な子供』が、案外近くにいることに面食らった。

次の日、教室へ向かう俺の肩を叩いたのは、ゲラゲラ笑うナベキと、妙に清々しい顔のトクちゃん。

左耳には、人生一つ目の反発を光らせていた。

ナベキ + シンドローム(前書き)

渡辺一城。症候群に押し潰されそうなオレらの仲間。

ナベキ + シンドローム

【ナベキ + シンドローム】

ナベキの苦手要素、ひとつめ、ナスビ。理由はぐにゃぐにゃした感じが最高に気持ち悪いから。

ふたつめ、学習。理由は単に、アホだから。

みつめ、炎。恐いから。

「恐い恐い恐い」

帰り道の畑で、雑草処理のための炎を見た。泣き叫びながら過呼吸に陥ったナベキを慌てて増子さんのところに連れて行ったのは、小学校5年生のとき。

ナベキの『保護者』である増子さんが、手慣れた様子で呼吸を落ち着かせるのを見て、オレが思ったことは、

『こんな母親だったらなあ』

というあまりにも自己中心的な考え。

「恐い恐い恐い。」

中学校の中庭で、3年の先輩がタバコの火を大きくさせた。

酸素をたくさん肺の中に押し込めて、ガタガタ震えるナベキを、シユウ君と一緒に保健室に引っ張って行ったのは、中学2年生のとき。

『学校一色っぽい』で有名な保健の先生が、ナベキのために目の

前を駆け回り、オレが思ったことは

『ああ、今日も先生いい匂いがするなあ』
といういかにも中2らしいイカ臭い考え。

「怖い怖い怖い」

ナベキが集めたガンダムやらエヴァンゲリオンやらで埋まったカラフルな（それでいて、ちょっとだけオタクキーな）部屋で、ナベキが炎の夢を見た。平均的な高校生よりも、薄くて、頼りない胸を激しく上下させながら、ソファの上でうなされるナベキを、急いで起こして涙を拭ってあげたのは、高校1年生のとき。

『ああ、もう嫌だ。無理。ダメ』と、素晴らしくネガティブなことを言い出すナベキを見て、オレが思ったことは

『ああ、なんて可哀想に』
という憐れみと同情。

「怖い怖い怖い」

シュウ君の部屋のテレビが火事の報道をした。

最近噂の連続放火魔。

久しぶりに聞いた荒く哀しい息使いに目を覚ますと、ナベキはお気に入りの場所（シュウ君のソファ）から転がり落ちて、ダラダラと汗を流している。

台所にジュースを取りに行っていたシュウ君は、部屋の扉を開くなり、ナベキのところに駆け寄ってきた。

「はっ……はっ……はっ……ひゅうっ……」

「シユウ君、おま、袋どこ!？」

「えっ!?!あ、あっち!あれ!あっちだつて!?!」

「台所な!？」

「そ!台所!!」 「はっ……はっ……はっ……ひゅうっ……」

ガラにもなく慌てるシユウ君に、『使えねえ』と心の中で吐き捨てながら、台所まで麻波ダツシユ。

ナベキの手は、しっかりとシユウ君のシャツを握っていたから、大丈夫。

多分、生きてる。

「ああっ!!どこだつつの!クソシユウ!!」

他人の台所をここまで荒らすやつああ中々居ねえな、とか思ってるオレは、結構冷静なのかもしれない。

骨々しくて男らしい自慢の指先は、小刻みに震えてはいたけれど。

「ナベキ!!てめ、死ぬなよ!」

シユウ君のせいで見つけるのに時間がかかりすぎたスーパーの袋を、シユウ君に投げつけナベキの口に当てさせる。

「ひゅうっ……ひゅうっ……」

もうだいぶおさまってきたみたいでホツとした。

シユウ君は相変わらず慌てていてメガネの奥は情けない。

こいつ、マジでためになんねえ。

「マジ!死ぬかと思ったね!!」

「うん、死んだかと思ったよ？」 「本っ当！！シユウ君マジで焦ってたよな！！」

「え！マジでっマジでっ！？シユウ君オレが死にそで焦ったー！？」

「焦ったー！？」

「うっせー！黙れチンカス共！！」

「ほら、照れてる照れてる」

「ウケるっウケるっ」

「あー。もうマジ死んでくださいますか、お二人さん」

今日のナベキはどうだった？

オレはどう思った？

「っあー、こんな過呼吸辛いとか！あんたらにはそれが分かんないとか！！ウザインですけどっ！！」

昔、機嫌が悪かったナベキな吐かれた言葉。あれは効いたね。

「死にたい。もういや、辛い辛い怖い怖い」

昔、ひどい発作を起こしたナベキが絞り出した言葉。

死にたい死にたい。

もう無理もう無理。

なあ、ナベキ。お前の母さんはさ、絶対お前を見てるんだぜ。

なあ、ナベキ。お前の父さんはさ、絶対お前を見てるんだぜ。

なあ、ナベキ。オレ等はさ、いっつもお前を見てるんだぜ。

だからさあ、なあ、ナベキ。

大丈夫だから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6677a/>

アホとピアスとメガネとバカ校。

2010年11月18日03時04分発行